

# JMA History

## 40年のあゆみ

2013年9月、社会医療法人ジャパンメディカルアライアンス(旧：医療法人社団仁愛会)は設立40周年を迎えます。  
今日に至るまでの紆余曲折の数々、道のりは決して平坦なものではありませんでした。  
先人たちの汗と涙の歴史をたどります。



Episode-1 | 草創期 1967-1972  
大志を抱いたスタートは苦難の始まりだった ……11

Episode-2 | 埼玉創設期 1973-1982  
無我夢中、がむしゃらに働き続けた日々 ……21

Episode-3 | 海老名創設期 1983-1999  
法人運営の転換期、新たな試練へ向けて ……27

Episode-4 | 発展期～現在 2000年以降  
仁愛会からジャパンメディカルアライアンスへ ……35

## 大志を抱いたスタートは苦闘の始まりだった

「少年よ、大志を抱け」とは、米国のクラーク博士が札幌農学校（現・北海道大学）の一期生たちに別れの辞として贈ったものだ。それから約100年後の1973（昭和48）年。大志を抱き、夢を実現した若者たちがいた。関口勝也、田中昭太郎、南嘉輝、野村忠弘の4人である。

医大を卒業したばかりの医師を中心に同じ志を持つ者たちは、今でいう地域に根差した医療体制を実現しようと歩き始めた。

それは40年後の現在、社会医療法人ジャパンメディカルアライアンス（JMA）につながる一里塚であると同時に、仲間たちの決別や苦闘の始まりでもあった。

大学の同級生たちが集まって酒を飲み交わし、酔った勢いそのまま起業する話にまで発展するケースは、現代でもよくあることだ。

若さゆえといえどそれまでだが、その若さこそが爆発的なエネルギーを秘める元でもあり、それが無ければ何も始まらないことはだれもが知っている。

若い人に限らず、大きな夢を持ちにくくなってきた現在の人々にとって「大志を抱け」というクラーク博士の言葉など、死語に近い感覚かもしれない。

医療という特殊な世界で、大学卒業後まもなくから病院経営に乗り出したパイオニアたちは、やはり特異な存在だったのかもしれない。

私立医大の名門、日本医科大学（日医大）に集った4人に大学入学前の面識はない。皆1967（昭和42）年に日医大を卒業した、いわば同窓・同級生たちだ。キャンパスで出逢い、親交を深め、後年、JMAの前身である医療法人社団仁愛会の設立に結びついていく。

医学進学の教養課程が行われていた日医大国府台校舎（千葉）で知り合ったのは関口勝也、田中昭太郎、南嘉輝と後に加わ

る福田晃一の4人。教養課程の同学年は45人ずつ2つのクラスに分かれ、田中を除く3人が同じクラスだった。医学という同じ道を進もうとする学生たちが打ち解けていくのは早かった。

### キッカケは写真部や卓球遊び

最初のキッカケは、田中が始めた写真部だった、という。「たまたま昼休みにカメラを持ってキャンパス内で写真を撮っていた。そのときに南が近寄って来て『写真、好きなの？』と聞かれたのを覚えている。大学にクラブとして写真部は存在していましたが、活動はしていなかったに等しい状態でした。まあ、そこで私と南が『写真部を立て直して何かをやらうよ』という話になったのだと思う」（田中）

ほんの些細な始まりが、医に関するものではなく、趣味や好きなことについてだったのはいかにも大学生らしい。

「あの当時は活動らしいことをしていないから、部室もなければ現像する道具もなかった。まあ、だから、実体のない写真部のようなもの。さてどうしようかと思えば、私が大学の理事長にあてて、『写真部で積極的に活動したいので部室を作してほしい』と嘆願書を書いたことを思い出します。思えば無茶な話で、部室ができるとは夢にも思っていなかったのです。でも、なんとかアクションを起こしたかった」（田中）

それが、なんとかなったのである。この当時、大学への入学金が10万円、授業料が年間10万円の時代だったというが、そのときに大学は「100万円もお金を写真部に出してくれた」そうだ。

それとともかくにも新しい写真部の部室をしつらえ、現像のための暗室も当然、新設された。「もしかしたら私が書いた嘆願書だけではなくて、どこか他から力添えがあったのではないか。そうでなければ考えにくかった」（田中）というが、仮にそうであっても、一直線の思いが大学当局を動かしたこ

田中先生は高校時代卓球の選手だったから、非常に上手だった。

ピンポンとか卓球遊びなんていうよりも、

真剣なラリーが続いていた。負けず嫌いの人が多かったからね—— 関口



学生時代の関口（左）と田中（右）

とは間違いがなかった。

部屋ができれば人は集まってくる。人の輪は次第に広がっていった。実体がなかったせいもあって会うことすら限られていた写真部の先輩たちとも交流ができ、さらに東京大、千葉大、東京医科歯科大、慶応大、順天堂大、日本大、昭和医大、慈恵医大、東京女子医大らと日医大で構成する「関東医学部写真連盟」を再編し、撮影会や合同写真展も企画した。

写真部でも交流を持っていた南は、社交的な性格の田中とはまた異なる持ち味を備えていた。当時、日本中で流行していたダンスパーティを主宰し、こちらでも大きく人脈を広げていく。

写真部とは別の分野からもつながりは生まれた。弓道部を作った関口勝也は、授業の合間や自宅にあった卓球台を使っただけで卓球遊びから、田中や南との関係を築いていく。実家が酒蔵を営む関口勝也は、地元では知らぬ人などいない名家に生まれた。自由闊達な性格は、厳格な家柄でありつつ、不自由のない家庭環境が育んだものだった。

「田中先生とは卓球がキッカケで知り合ったんじゃないかな。そうでないと私との接点が見つからない。田中先生は高校時代卓球の選手だったから、非常に上手だった。ピンポン

とか卓球遊びなんていうよりも、真剣なラリーが続いていた。負けず嫌いの人が多かったからね」（関口）

組織運営には理念や運営計画すべてを経営トップが作り、それを職員へ説明し、理解を求めるトップダウン方式がある。企業の創業期や組織の危機的状況下においては、当然ながら強いリーダーシップが必要とされるものだ。写真部への補助金を得た田中や弓道部を作った関口らには、学生時代からリーダーとしての資力が備わっていたであろうことを伝えるエピソードでもある。

### 意気投合、「医学・医療の経営を研究する会」発足へ

南と田中、そして関口。この3人が授業を終えたキャンパスや卓球、ダンスパーティの会場でも行動をとることが増えていく。どちらかといえば、南と関口とが頻りに会うことがあったそうで、双方の家に泊まって徹夜マージャンに興じることもあった。そこに野村忠弘、福田晃一、松延康泰、矢部憲憲が加わり、同級生7人が巡り会うことになる。

7人がそれぞれを点だとするならば、各々個別に結び付いて



いくのが線だ。これを小さいながらも面にする契機ともいえるのが、自発的に生まれた`医学・医療の経営を研究する会`の集まりだった。病院経営の在り方や、先を見据えた先進的な医療機関の経営をみんなで話し合い、理想的な姿を探るものだった。話し合いが熱くなると、それは必然的に自分たちに置き換えられていく。

「俺ならこうする」

「いやボクはこうだな」

「だったらこうした方がいいだろう」

同級生7人はどンドン打ち解けていった。共通の趣味でもあった写真で部活動を行おうと集まったことから一気に距離を縮めていく。最初のころは趣味や好きなものに没頭していた彼らが、将来のことを語り始めるのに時間はかからなかった。

思いや考えは単なる研究会としてのそれではなく、「いつか自分たちの病院を作りたい」に変わっていく。それもまた、ごく自然な成り行きだったのかもしれない。

彼らは気が付いた。ずっと先にあつて、もしかしたら夢物語にすぎないかもしれなかった病院経営が、研究会で話し合ううちに現実感が伴い、もしかしたら・ひょっとしたら――の思いに変化してきたことに。話し合いを重ねるほど、夢が理想に、理想が野望に、野望が計画へ、と変貌を遂げていった。

「学生とはいえ、自分たちの気持ちの中に、`いつかは、いずれは自分たちの病院を作りたい`、といった気持ちは明らかにあつたように思う。それで、よくよく考えてみたら、実家が病院だったのは南と福田だけ。でも、南の家ではすでに病院を閉じていたし、福田のお父さんも亡くなっていたんだね。それを考えると、最初のころに集まったメンバー7人の中で`実家の後継者として病院を経営する`、という人間はだれひとりい

**正直、一人で開業するのは、なんとなく怖いとっていたので、**

**みんなで一緒にやればなんとかなるかもしれない、なんて思いはあつた** —— 関口

なかつたことになる」(関口)

7人は、いずれも1967(昭和42)年、日医大を卒業した。1967年といえば、時の佐藤栄作首相による外交政策に反対する学生たちが羽田空港近くで闘争を繰り広げた一方、ビートルズの影響を強く受けた日本の若者がグループサウンズ(GS)ミュージックで世を熱狂させ始めていたころだ。日本人が敗戦の痛手から立ち上がるために突き進んだ時代は終わり、自分たちの考えで次の道筋を決めていく新しい時代を迎えようとしていた。佳き時代の幕開けは、同時に何事も自分自身の力と決めていかねばならない混迷の時代に歩を進めていた。

**無意識のうちに芽生えた**  
**「自分たちの理想の病院を持ちたい」**

現在もJMAの役員である福田晃一は懐かしそうに、こう振り返った。

「そもそもの始まりは、もちろん全員が日本医科大出身ではある一方、奇縁と呼べるような出会いもあつた。私は大学1年のときに胃潰瘍を患い、治療後も体調が思わしくなかつたのでその1年を休学。やっと復学したら、自分が住んでいた下宿先に南嘉輝が入ってきた。同じ屋根の下で暮らしているわけですからね、いろいろなことを話し合うようになる。個人的にはやっぱりあの出会いがすべての始まりだと思う」

昔も今も実直そのものの福田は、幼いころから身体が比較的、弱かつた。しかし、あくまでも現場での医療に自分の生きる道を見だし、今もその考えは変えぬほどの強さも持っている。

インターン研修を経て、全員が医師国家試験に合格した。関口勝也、南嘉輝、福田晃一の3人はそろって国立豊岡病院(埼玉県入間市、現・西埼玉中央病院)へ、田中昭太郎は東京

女子医大内科へ、野村忠弘、松延康泰、矢部憲憲の3人は日医大付属病院へ進んだ。

大学を卒業して、すぐにでも病院経営に――の熱い気持ちはあつたものの、事はそれほど簡単なことではなかつた。

「正直、一人で開業するのは、なんとなく怖いとっていたので、みんなで一緒にやればなんとかなるかもしれない、なんて思いはあつた。赤信号を渡ろうとするのと同じで、そういう風潮はみんなにあつたかもしれない」(関口)

「それと(独立・開業を)始めるのならしっかりとやりたい、という気持ちは強かつたように思います。せめてインターン研修病院レベルの病院は作りたいという気持ちはたしかにありました」(田中)

気持ちや思いが先行しても、経験や本当に必要になるであろう知識が伴わない。しかし、それは彼らの勉強が足りなかつたとか、意志が弱かつたなどという問題ではない。医の世界でなくとも、理想と現実のはざまに立ちはだかるジレンマともいうべきものだった。

7人それぞれが異なる道を選び、進んでいったのは後になって考えれば`さまざまな経験が後年、独立・開業したときに役に立つ`と信じたからだ。進んだ道こそ違うものの、彼らに共通していたのは自分たちのこれからに対する熱い気持ちだった。全員がスタートラインに立つた1968(昭和43)年、季節は桜が咲きほころ4月を迎えていた。

**日医大卒業後も「志」は続いた**

7人はそれぞれ別々の道を進んだ。ごく一般的に考え、多くの前例でみる限り、「みんなで理想の病院を作ろう」といった志もまた、うやむやになっていくことが多い。日常の煩雑さと事実上、初めて経験するドクターとしての医療機関勤務では、日常が優先されてしまうことの方が多いからだ。

しかし、彼らは違った。豊岡病院に入った関口、福田、南の3人は、日医大卒業直後から病院新設の計画を練りつつ、内科でも外科でも治療を施した。

「当時、国立豊岡病院というのは小さな病院で、もともとは結核療養所だった。入間市にあつて現在は国立の所沢病院と豊岡病院が合併して、国立西埼玉中央病院になっている。入局したときから外科の先生は2人しかいないので、1週間目す

ぐに急性虫垂炎の手術をやるような状況だった。2年半いる間に、胆のう摘出術、腎臓摘出術、パセドウ病の甲状腺手術、脳外科の手術の手伝いなどなど、とにかくいろいろな経験をした。整形外科の手術もあつたな。今思えば、あのときの経験が今日までに役に立っていると思う」(福田)

**建設地の模索**

こうしたかけがえのない機会を得ておよそ3年。1971(昭和46)年、関口と南が動き始める。自分たちの病院を建設する立地場所の模索からスタートした。2人は休日を合わせ、あるいはそれぞれが別々の休日のときに土地を見に出かけた。小田急線沿線のみうりランド近くや埼玉県の所沢など、足しげく通つた。

「病院を建てる場所としてはそれなりに良い所はあつた。ところがなんせお金がない。資金がまるで足りない。私も南も月給にして2万円少々の時代。その身分に坪4万円の土地は、他と比較すれば安価ではあつても、私たちにはとても手が届くものではなかつた」(関口)

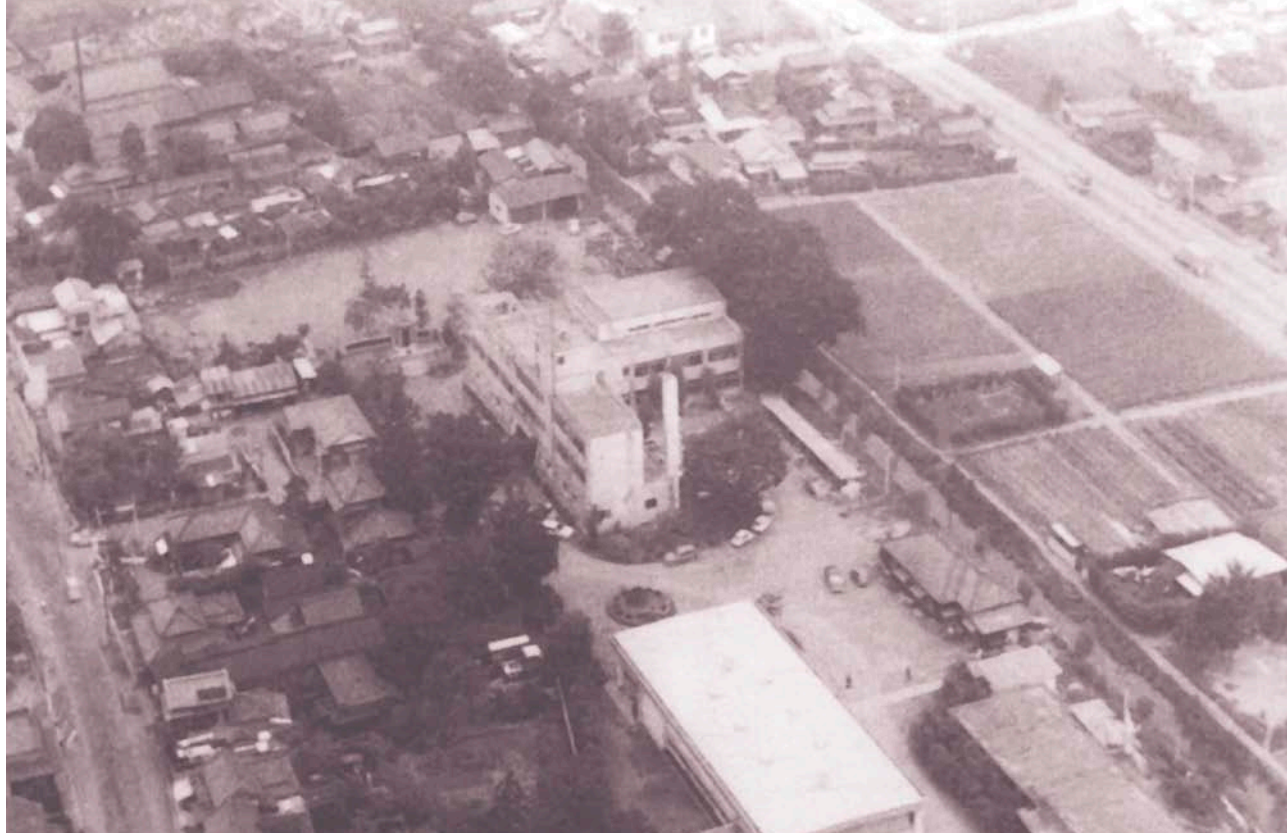
2人だけで思い悩んでいても埒が明かない。少しずつ増えてきた仲間の結婚式やパーティに出かけ、バラバラに散つていた当時のメンバーが顔をそろえるときには、かならず病院建設の計画を話した。

そこへ浮上したのが南の父・南和嘉男氏が経営していた「南病院」を使わせてもらう話だった。三重県紀伊長島町にあつた同病院は、このころすでに閉院の話が出ていて、であればそのまま施設を引き継ぐようなかたちにはできないか、というものだった。医療機器もそのまま使えるし、資金不足にあえぐ彼らにしてみれば非常にありがたい話ではあつた。

関口、田中、野村、南の4人がこの話に賛同した。しかし――いつかこの話も立ち消えになってしまった。構想は暗礁に乗り上げたかに見えたものの、関口の兄・関口博正氏が所有する埼玉県杉戸町の土地、600坪を借り受けることが決まった。二転三転しつつも、急転直下で動き始めたのである。

土地のメドはついた。建設地購入のための資金はとりあえずいらなくなったが、次にのしかかってきたのが建設着工に向けた費用である。とにかく資金を貯めなければならぬ始まらない――関口と南は豊岡病院から栃木県黒磯市にある菅間





杉戸町役場周辺(昭和40年代)

病院(栃木県那須塩原市、現・社会医療法人博愛会菅間記念病院)へ勤め先を変えた。諸々の事情を抱えていた福田は、いったん、この開業構想から離れ、自身の親戚の病院でもあった門倉病院(埼玉県深谷市)に勤務することとなった。

## 浮上した資金不足問題

ちょうどこのころ、1971(昭和46)年、病院の建設や開業のカギを握る重要な人物が現れる。当時、東京都杉並区で会計事務所を営んでいた栗山重也である。栗山はその後、JMA(当初は仁愛会)創業時から事務方を仕切る中心メンバーの一人になる。南嘉輝との出会いをこんなふうに回想する。

「私は三重県の尾鷲市で税理士の職に就いていたときに、南先生のお父様である南和嘉男先生が院長である「南病院」の顧問税理士を務めていた。昭和46年だったか、「息子達が病院を作るようなので相談に乗ってやってくれないか」とこの

とで、仁愛会の初代理事長となる南嘉輝先生が私を訪ねてきた」(栗山)

病院開業構想の中心メンバー達にしてみれば、やっこのことで建設地のメドはつけたが、それから先がまるで見えてこなかった。すべてに関わる「資金」がない。皆無ともいえる状況のなかで、経理に関してプロフェッショナルに教を請いたいと思ったのは自然なことだった。

「あのときの創業者達は…まだ若かった。たしか30歳になったばかりくらいではなかったか。彼らからお聞きした話の内容はストレートでシンプルだった。「何人か自分たちの仲間て病院を始めようと思う。建設地は、仲間の兄が所有している土地を借り受けることも決まっている」ということだった。話は分かりやすかったが、なにぶん、資金がまったくないに等しいとのこと。意欲はあってもまだ30歳そこそこの若い人たちがばかりなので経済的には余裕もなかった」(栗山)

縁は奇なり、という。横浜の会社勤めを辞め、東京・杉並に

個人事務所を開いていた栗山は、その10年以上も前に仁愛会創立者の一人と接点をもっていた。巡り巡って、再びその接点が濃度を増していく。点から線へ、そして線から面へ。少しずつスピードを上げ、輪郭をはっきりとさせていった。

## 公的機関からの融資借入れが 病院建設への大前提

南と関口は菅間病院での勤務で資金を蓄える傍ら、勤務が終わるとマイカーで東京へ向かい、栗山の指導を仰ぎながら資金調達と計画を練るようになった。自己資金がほとんどないため、公的金融機関である医療金融公庫(現・福祉医療機構)からの借入れが建設に向けての大前提となった。

「とはいえ、そう簡単にお金が借りられるわけではない。それは今も昔も同じ。医療金融公庫に審査を受けるための書類を提出しなければならない。つまり、破綻のない正当性をもった計画書が必要で、その計画を見て融資するかどうかが決まる。収支の予想とか計画を数字で表していくのだが、医療金融公庫に通い詰めて、一般的な正当性のある数字を聞きだし、何度も何度も作り直していた。給食の材料費は収入の何パーセント、診療報酬は一人当たりどれくらいが妥当なものなのか、と。こういった内容が借入れをした後に返済が可能だ、という見通しになるわけだから、作るのは必死だったと思う。彼らにとっては初めて尽くしで、参考にするような経験がなにもなかった。大変だったと思う。南先生、関口先生、田中先生、野村先生の4人が中心だったように記憶している」(栗山)

公庫からの融資を実現させることは、イコール、銀行からの融資を左右することにもなった。つまり、公庫からのOKが出なければ、お墨付きがついたことにはならず、銀行でもOKは出せない仕組みになっていた。

## 「30歳そこそこで医者になった人たちが集まって、病院をやろうと いうのはちょっといかなものか」という声が多かった — 栗山

このころ作成した収支計画案によると、病院経営において人件費率35%以下、材料比率は給食材料を含めて30%以下で経費の割合はおよそ15%程度と低いものだった。仮に金利の負担率が8%あったとしても、純利益率が12%に上る計算だ。現代では考えられないような良い時代でもあった。

また、計画された新病院は600坪の敷地に1期工事で2階建て50床を想定。その後、2期工事を計画し、4階建てに増築する見通しを立てていた。工費は1期分だけで1億7000万円ほどと試算し、自己資本は1500万円、残りの1億5500万円強と、開業後の運転資金についてはすべてを公庫と銀行からの借入れで賄う計画だった。そこには、ゼロからのスタートでありながら中期計画として、4階建ての2期工事も視野に入れた先見性も盛り込まれていた。

しかし…融資の決定はなかなか出なかった。大きな理由の一つは4人の若さ、であった。30歳そこそこで勤務医としての経験はあるものの、決してそれ以上ではない。お金を貸し出す側としては、信用力に欠け、いざとなったときの担保も見込めないのであればGOサインはどうやったって出せなかった。

「30歳そこそこで医者になって何年も経っていない人たちが集まって、というわけだから、聞こえてくる声は「そういう人たちがばかりで病院をやろうというのはちょっといかなものか」という類いが多かった。おそらくは眉唾みみたいなものと受け止めていた機関も多かったのだろう。書類作りには私も携わったが、年齢や経験値を言われては4人としても為す術がなかった」(栗山)

## 周囲の協力が融資決定に結び付く

それでも悪いことはそうは続かない。焦りの色が濃くなるなか、粘り強い交渉が実って1972(昭和47)年9月、何度目かの申請でまず公庫からOKが出た。ほどなくして埼玉銀行(現・



埼玉りそな銀行)からも融資の認可が下りた。

そこにも関口の兄・関口博正氏の姿が見え隠れしている。埼玉県杉戸町で関口酒造を知らぬ者などいなかった。1822(文政5)年の創業で、`豊泉、`杉戸宿、`といえば、国内でも有数の銘柄として名高い。博正氏は、いわば地元の名士でもある。交渉相手の埼玉銀行杉戸支店は関口博正氏のメインバンクだったことも幸いした。

担保の不足については、今後、建設する見通しの病院施設と博正氏から借り受けている敷地も対象とすることで合意を得た。一般的には貸した土地を、賃借人の担保にすることはあり得ないことなのだが、関口博正氏は実弟を含めた創業者たちを信頼して担保を設定した。建設へのGOサインがここで初めて出たのである。

開業へのお膳立てが急速に固まっていく。だが、それでも彼らには急務の案件がまだまだ残っていた。一つは言うまでもなく、資金の不足だ。病院施設が完成したときに資金がスカラカンの状態では、経営は成り立たない。医療法人の設立でも費用はかかる。あれもこれも、と考えれば考えるほど頭が痛くなるぐらいお金がかかるものだ、と思い知らされていた。

しかし、考えあぐねていてもしょうがなかった。自分たちができることは医療の道で医師として突き進むしかなかったし、結果としてそれでお金が得られるのであれば、地道に自己資金を増やしていく他なかった。

そこで今度は、関口と南が会津中央病院(現・一般財団法人温知会会津中央病院)で勤務することになった。少しでも条件の良いところに行こうと決めた。東京女子医大に勤務していた田中もほぼ同時期に同病院に合流した。

現場はひどい状況だった、という。「400床はあった大きな病院なのに、たった1人で宿直も務めた」(関口)ほどだった、という。処方箋を書くだけであつという間に1日が暮れていくこともあったそうだ。

## あのころは……我ながらよく働いたなあ、と思う。月に40万円の手取りがあったけれど、たしか15万円で生活したはず。残りは蓄えに回した —— 田中

「でもちっとも苦じゃなかった。面白かったのは、糖尿病の患者会を立ち上げたことである。当時、近辺にあった工場とか会社の総務課に電話をかけて、私はこういうものだけど、昼休みに糖尿病の講演をさせてほしいなんてね。今にしてみれば図々しかったと思いますが、あのころはパワーポイントも無くって、模造紙にいろいろなことを書き、それを使って昼休みに各会社の食堂で話をしました。当時は職場健診とか産業医とかいうシステムはなく、歓迎してくれるところがほとんどだった。次第に糖尿病の患者さんが集まってくるようになり、病院の栄養士と一緒に糖尿病の食事会や生活習慣の改善や糖尿病の合併症の話などをしました。あれは楽しかった思い出です」(田中)

## それでも資金は足りない ——寝食を忘れての勤務医生活

創立メンバーの一人となった野村も会津中央病院にやってきた。1972(昭和47)年から翌1973(昭和48)年にかけて、4人は死に物狂いで働いた。そこで得た給料のほとんどを病院開業のための資金として積み立てていった。

「あのころは……我ながらよく働いたなあ、と思う。月に40万円の手取りがあったけれど、たしか15万円で生活したはず。残りは蓄えに回した」(田中)

一方、週1日の休日を使って東京に出た。ゼネコン大手の大成建設(現・大成建設株式会社)に新病院の施工を依頼したことから、そのための下準備に走り回っていた。

構造の設計を川口衛氏、本体設計は佐々木宏氏に委託することも決まった。会津中央病院は毎週火曜日が休診日だったため、月曜の夜に会津を出発し、火曜の夜までに多くの関係者に会って交渉を進めていった。寝食を忘れて仕事に没頭するというのはまさにこのことだった。4人はそれぞれの立場で

き得る最大限の力を発揮していた。

このことは、東埼玉病院(現・東埼玉総合病院)創立以来、十数年間掲げ続けた標語「超我の奉仕」を楽しみながら実践した時代だったといえよう。超我の奉仕とは、1900年代初頭、米国人ベンジャミン・フランク・コリンズが人道的な奉仕活動や高い道徳的水準を奨励する国際的組織・ロータリークラブにおいて、他人のために尽くす意義と重要性を説いたことから始まった、といわれている。これが現・JMAの源を示す言葉にもなった。

1972(昭和47)年12月、設計・施工業者との本契約を取り交わした。

「医療法人社団仁愛会 東埼玉病院新築工事」は、施主に関口を据え、同年12月末に地鎮祭を行い着工する見通しで、延べ面積2090平方メートルの規模に工費1億2000万円が投入される予定となった。完成は1973(昭和48)年7月末の計画だった。

## 病院建設を妨げた第1次オイルショック

工事は着々と進んだが、かならずしもすべてが順調だったわけではない。その一つは、1973(昭和48)年10月に勃発した第4次中東戦争がキッカケとなった第1次オイルショックである。

原油価格がハネ上がり、建設資材を含むあらゆる物の価格が上昇した。かつて経験したことのないようなインフレであった。消費者物価指数でみると、翌1974(昭和49)年は前年比で23%も上昇し、狂乱物価の時代に突入した。

大手・大成建設に施工を委託したのは正解だった。なぜなら

多くの施工業者が資材・鋼材の高騰を直接、建設費に反映させたのに対し、大成建設はあらかじめ資材を備えていたので、部材の不足や建設費の上昇にはつながらなかったからである。

こうして工事は進んでいく。棟が上がり、徐々にかたちになっていく`自分たちの病院、を見るたびに、感動で胸が震え、同時に武者震いともいえるような緊張感が彼らに走った。次の難関が目前に迫ってきていた。

## ギリギリの資金繰りがぶつかった 医療法人設立への壁

それは医療法人の設立だった。上物が出来上がってもそれはハードウェアが整備されたにすぎない。本来であれば、融資を受ける医療金融公庫との交渉時点で法人の設立を明確にすべきではあったのだが、実のところ、その余裕はなかった。



A



B



C



D

- A. 昭和48年4月 会津時代の給与明細
- B. 病院開設許可申請書
- C. 原始定款
- D. 医療法人設立認可申請書





学生時代の田中

そこで当初は関口の個人病院として開設計画を立て、その後、法人化を進める手はずであった。工事の槌音が響き、完成はいよいよ秒読みとなった。しかし、彼らにはもう資金の余裕はなかったのである。

「学生時代の同期が集まって病院を作り経営することに対して私の実家では、心配しつつもウエルカムだったんだ。それはやっぱり息子が故郷に帰ってきて病院を作ってくれるわけだから、親や家族にしてみれば決して悪い話ではなかったはず。ただ、そうは言っても、実家は商売をしていたので、リスクを背負い続けることにためらいや抵抗が全く無かったとは思えない」(関口)

それでも法人設立に向けて、出資金が必要不可欠だった。関口は田中とともに母親に頭を下げた。

「出資金を捻出するために借金をしたのだが、その保証人になってくれた。その後の流れも加えると、最終的には2億円くらいは借金をしたのではないか。ずっとなにかあるたびに実家が連帯保証人を続けてくれた。本当にありがたかった」(関口)

「関口先生のお母様と、そして土地を提供してくださったお兄さん。この2人がいなければ、今ごろはJMAの姿もなかったかもしれないし、もしあったとしてもまるで今とは違う姿になっていたはず。自分のことをこんな言い方でまとめるのはどうかとも思うが、学校を出て数年の青二才、しかも関口先生のお母様からすれば、私などこの馬の骨か分からない赤の他人にもかかわらず連帯保証を受けてくださった。もちろんお金がまるでない状況なので、その点でも助かったのは事実だが、連帯保証を受けてくださったことにも本当に感謝の気持ちでいっぱいだった。今もそれは全く変わりがない」(田中)

### わが子に全幅の信頼を寄せて 保証人となった

そう、「どこの馬の骨か分からない」のに連帯保証を受けたということは、とりもなおさず、関口の母親が田中という人物を見据え、信服を寄せたということ。そしてなによりも息子の関口勝也を全面的に信頼したことに他ならない。

彼らはここで多くの貴重な人生経験ともいうべき出来事に遭遇した。がむしゃらに頑張ってきたことは言うまでもないが、

人と人の絆やつながりによって物事は動いていること。  
そしてそれが、仮に犠牲を払ってでも`信ずることに揺らぎがない、ということ。

それでもいつもどこかでだれかの助けを受け、人と人の絆やつながりによって物事は動いていること。そしてそれが、仮に犠牲を払ってでも`信ずることに揺らぎがない、こと。どちらも若い彼らには経験したくても簡単にはできないことであった。

後年、関口の母親が他界したとき、それぞれの事情から離れて行った創立メンバーが全員、お別れの席に集まったことは、なによりもこの`絆、を物語っている。関口の母親には分かっていた。自分の息子を信じ、今だけでも支援すればこの人たちは飛躍できる、と。母の子を思い信ずる力は偉大だ。そして関口と田中を始め、彼らもそういった一人の人間の信頼の思いに応えようと、その後の人生を歩んだ。JMAのかたちが見える原点が、そこにはあった――。

### 「医療法人社団仁愛会」設立へ

1973(昭和48)年7月15日、開院を2カ月後に控え、彼らは「医療法人社団仁愛会」設立に向けて決議した。関口勝也、田中昭太郎、南嘉輝、野村忠弘がそれぞれ370万円ずつ、関口博正氏(関口勝也の実兄)が20万円の合計1500万円をもって法人の申請を行うことに決めた。

役員は理事長・理事が南嘉輝、理事に関口勝也、田中昭太

郎、関口博正氏の3人、監事は野村忠弘が就いた。本当の意味でのスタートラインに立ったのである。

法人名にある`仁愛、には、「仁をかかげて自らを律し愛の心で人に接する」、「仁と愛を基本理念に据え今求められる医療とは何かを問い続ける」――のスピリットを盛り込んでいる。仁愛は、医術とは切っても切れない縁の深い言葉だが、人は単なる動物ではなく理性を備えて真の人間らしさに近付くといった意味合いもある。ルネッサンス以降、仁愛こそ人の道、と説いた哲学者も多かった。

1973(昭和48)年、夏。彼らは日医大を卒業して7年目を迎えていた。丸裸のままで思い描いた理想の病院設立は、お金も信頼もない、ゼロからのスタートだった。しかし、死に物狂いで働き、動いて、少しずつではあったが信用を得て、支援も受けられるようになって、実現にこぎつけた。

多くの人は言う。若いときだからこそできたんだ、と。それは疑いようのない事実だ。しかしそれだけだろうか。年齢が若くても理想に突き進む気概や努力、そして意地がなければ成し得なかったはずだ。

仁愛会とは、まさに関口の母親が身をもって示した孔子による人間関係の基本、`仁、そのものである。スタート時も今も、JMAにはこの精神が宿っている、と喋っているのかもしれない。



関口母の葬儀にて